

# 音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティ： 台湾の二世代比較

石井 由理

National Identity through Music: A comparison between two generations in Taiwan

ISHII Yuri

(Received September 30, 2016)

## はじめに

19世紀から20世紀初頭に多くの民族が経験したナショナル・アイデンティティ形成過程においては、民族の「輝かしい歴史、文化的特徴、尊重される価値と美德」が愛国的な歌によって称えられた (Herbert & Kertz-Welzel, 2012: 1)。たとえばイングランドでは、歌唱が教育課程の一部に取り入れられ、共有のアイデンティティと共通の価値観を持つ国民コミュニティを作り出すものと考えられていた (Cox, 2010: 21-22; Finney, 2011)。また、日本やタイのように19世紀末から自ら西洋的価値観の導入による近代化を図った国においても、近代国家にふさわしい音楽として音楽自体は西洋化しつつも、上記のような内容をもった歌詞がつけられた曲が多く作られた (Bangchud, 2012; 石井, 2013)。これに対し、本稿が焦点をあてようとする台湾は、19世紀末から第二次世界大戦までは日本の一部として、第二次世界大戦後から1980年代末までは中華民国の一省として、いずれも台湾の外から来た統治者のナショナル・アイデンティティが台湾住民に対して教育されたという歴史をもち、学校における音楽教育もその一端を担ってきた。国家をめぐる中国大陸との関係という問題をかかえつつも、台湾の人々がようやく自らのアイデンティティとは何かを問い、学校教育に反映できるようになったのは1990年代以降のことである。

本研究の関心は、このように近代において国家が学校音楽教育をとおして育成しようとした「共有のアイデンティティと共通の価値観」が二度も大きく転換した台湾において、現在人々が共有するアイデンティティ、共通の価値観となっているのはどのような音楽かということにある。このテーマに取り組むための前提として、はじめに台湾の歴史的な背景について簡潔に述べる。そして次に、台湾の大学生とその一部の親を対象として筆者が2013年に実施したアンケート調査の結果をもとに、上記のテーマについて考察する。

## 歴史的背景

台湾住民の多数派は、明朝の頃から徐々に大陸南部から移住してきた福佬語（現在台湾語と呼ばれている言語の元）、客家語などを話す華人の子孫である。さらにそれ以前から住むオーストロネシア系言語を話す15以上の民族（原住民と呼ばれる）を加えた戦前からの住民を、一般的に内省人と呼んでいる。このような住民をもつ台湾は、スペインやオランダによる部分的統治、明の鄭成功一族の約20年間にわたる統治の後、19世紀末まで清国の統治下にあった

が、事実上は放置されており、各民族の間に台湾としての一体感はなかったとされる (Chang, 2002)。日清戦争の結果として日本に割譲された後、19世紀末から20世紀前半は日本の領土として統治されたが、この間に台湾で行われた学校教育は日本人としてのアイデンティティーをもたせるための教育であり、音楽教育でも「国民精神」を歌った歌詞の唱歌教育が行われた (劉, 2005: 190)。また、日本による統治の時代は台湾の近代化の時代とも重なっており、日本を通して西洋音楽文化を学んだ台湾の音楽家も生まれている。代表的な作曲家としては、後述のアンケート回答に出て来る「望春風」や「雨夜花」の作曲者で、台湾の音楽文化と西洋の音楽文化の融合を試みた鄧雨賢がいる。

第二次世界大戦で敗れた日本は、台湾を中国国民党政府の中華民国に返還した。代わって台湾を統治するようになった国民党に反発した台湾人がおこした反政府行動を政府が弾圧をしたのが、1947年の2.28事件である。この後、台湾では政治戒厳が敷かれ、国民党政府と台湾住民との溝が深まることとなる。1949年には大陸での中国共産党との闘争に敗れた国民党とともに多くの人々が中国大陸から台湾に移住してきた。戦後に大陸から移住して来たこれらの人々は一般的に外省人と呼ばれる。政治戒厳はその後1987年に解除されるまで継続したが、その間に学校教育では中国大陸も含めた中華民国の国民としてのアイデンティティーの育成がはかられた。このため音楽教科書の内容の多くは、西洋古典音楽を除くと、中国大陸の民謡や中華民国時代およびそれ以前の中国大陸の作曲家による作品であり、台湾の民謡や作曲家の作品は限られていたうえ、歌詞は台湾の言語であった福佬語、客家語、原住民の諸言語から中華民国の国語である中国語 (北京官話) に変えられていた。

内省人初の台湾総統となった李登輝によって教育の台湾化がはかられ、台湾の人々が学校教育を通して育成すべき自らのナショナル・アイデンティティーとは何かを模索し始めたのは、1987年の政治戒厳解除後の1990年代に入ってからである。それに伴って学校の音楽教育の内容も大きく変化した。1990年代の「音楽」、および2000年代の「芸術と人文」の教科書では、中国の音楽のうち大陸に関わる内容は激減し、台湾で継承されてきた音楽文化や台湾で創作された曲を扱うようになっており、台湾の言語的多様性を重視した教育政策を反映して、歌詞も中国語に加えて原語の歌詞を掲載することが多くなった。

## アンケート調査

以上、台湾の学校音楽教育が台湾の人々がもつべき共有のアイデンティティーと共通の価値観を育てるために提供してきた内容の変遷を述べてきた。近代化が遅れて始まったアジアとして、西洋の音楽文化を近代国家の国民が身につけるべき普遍的音楽文化と見なしている点は一貫しているが、独自の文化の方は、日本との共有・共通、中国大陸との共有・共通を経て、現在は台湾住民間で共有・共通するアイデンティティーと価値観を育てるためのものとなっている。しかし、このような教育を受けてきた台湾の人々自身が、実際にどのような音楽を台湾社会にとって共有のアイデンティティーや共通の価値観を示すものと見なしているかに関する調査は乏しい。そこで、本研究では政府によって何がインプットされたかではなく、その教育を受けた人々が台湾の音楽として認識している曲は何かを調査することとし、2013年に異なる世代の台湾の人々を対象としたアンケートを実施した。具体的には、台湾の二つの大学の台湾人アイデンティティーをもつ学生173人と、その学生を通して協力を依頼した親16人が回答者である。大学生世代は1990年代の教育の台湾化以降の教育を受けて育ってきた世代であり、それに対して親の世代は1987年の政治戒厳解除前の学校教育、つまり中華民国国民を育成す

るために国定教科書を用いて中国大陸に関する内容を多く学んできた世代である。

調査内容は、「台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」の各項目に該当する曲を10曲以内で回答するものであるが、回答曲数やそれぞれの言葉の意味の解釈は回答者に任されており、その解釈の仕方までも含めて調査の目的としている。これらの項目は筆者が過去に行った日本とタイを対象とした同様の調査でも用いたものであり、もともとは日本の学習指導要領に用いられた表現から抽出したものであるが (Ishii & Shiobara, 2007)、日本における異なる二世帯の回答の比較や、タイと日本の学生の回答の比較からは、世代や国によってこれらの解釈も異なることを示唆する結果が得られている。例えば「郷土の音楽」に関して言えば、日本の高齢者の回答は出身地の民謡やその名称が入った歌謡曲などに限定されたのに対し、大学生はそれらに加えて自分が子どものころに地元のスーパーや商店街で耳にした、その土地とは関係のない曲や、故郷の抽象的なイメージを歌った曲 (例えば「ふるさと」) などを回答している (石井, 2009 ; 2011)。またタイでは、「郷土の音楽」といえば、回答者の郷土であるか否かにかかわらず、イサーンという農村地帯のことやそこから都市に出稼ぎに来ている労働者の望郷の念を歌った、演歌のようなジャンルであるルークトウンが定番となっている (ポンパイチット&ベーカー, 2006)。台湾の場合、前述のように「台湾」と「国家」との関係が歴史的に複雑であるうえ、1990年代の教育の台湾化の中で1994年に公布された政策文書「郷土教学活動課程標準」のように、「国家」ということばを避けつつそれに近い含意で「郷土」ということばを用いて台湾を意味することも多いため、この三つの項目に対して回答者がどのような解釈をして曲を選ぶかも、共有のアイデンティティ・共通の価値観を探るうえで興味深い点である。

また、回答された曲について、回答者に可能な範囲でその曲の作曲者、歌っている歌手、ジャンルなどの情報を記入してもらった。台湾社会の共有するアイデンティティ・共通の価値観といった場合に、作曲者や歌手自身のプロフィールがどの程度影響しているものなのか、どこまでなら台湾のものであるとみなすのか、またそれぞれの曲のジャンルを回答者がどのように認識していて、どのジャンルをそれぞれの項目に相応しいと考えているのかも、これらの記述から得られる情報である。これらの情報には回答者の認識や記憶の誤りによるものも含まれるため、後日、筆者と台湾人リサーチ・アシスタントが再確認した。

このように本調査は回答結果を数字で示してはいるが、質問のもつ曖昧さを徹底的に排除するのではなく、回答された曲の特質から回答者が質問項目の曖昧さをいかに解釈したかまでも読み解こうという点で、質的な研究である。また、ごく小規模な調査であり、サンプルも大学生とその親という偏りがあるため、台湾の高い大学進学率を考慮に入れたとしても、この結果を以て台湾全体を代表する結果であるとみなすことはできない。しかし、質問に用いられた用語の解釈や回答曲数も含めて回答者の自由連想による記述式の回答であり、親に関しては互いに全く知らない、住んでいる地域も異なる人々からの回答であるため、たとえ16人のサンプルであっても、その結果は台湾社会が共有するアイデンティティ、共通の価値観を探るうえで貴重な示唆を与えてくれるものである。本調査における上記の限界と特徴を踏まえたうえで、以下に調査結果を考察していく。

## アンケート結果：「台湾の音楽」

「台湾の音楽」に対する回答数は大学生では935回答 (うち14回答は不正確な記述等の理由で曲の存在を確認できなかった)、親では105回答であり、あげられた曲目数は、大学生では前述の不明曲を除いた433曲、親では73曲であった。

回答された曲のうち、回答数が多かった順に10曲を並べたものが表1である。表中、明朝体イタリックで示されているのが台湾語の曲、太字ゴシック体の曲が中国語の曲で、「高山青」は両方の歌詞をもつ。学生と親の回答を比較してみると、台湾語歌曲の「望春風」「雨夜花」「家後」の3曲が共通して上位に入っている。このうち「望春風」と「雨夜花」は前述の日本統治時代の台湾人作曲家鄧雨賢の作品であり、戦後は、1970年代から80年代にかけて活躍した鄧麗君（日本ではテレサ・テンの名で知られる）によって歌われた。特に「望春風」は大学生では4分の1以上の回答者、親では半数以上の回答者が答えており、世代を越えて「台湾の音楽」の代表だと考えられていることがわかる。鄧麗君は外省人の両親をもつ台湾生まれの歌手で、中国大陆を含むアジア全域で人気があり、中華民国への愛国心でも知られていた。「家後」は台湾大衆音楽作曲家鄭進一の作品で、もっぱら台湾語の歌を歌う江蕙という歌手が歌った曲である。内容的には上記の3曲とも恋心や夫婦愛をテーマとしたものであり、必ずしも台湾と直結する内容の歌詞ではない。学生の回答ではこれら3曲以外は周杰倫や五月天（May Day）などの現代台湾の人気歌手の中国語の流行歌曲である。鄧麗君が歌った「甜蜜蜜」は、もとはインドネシア民謡の「Dayung Sampan」であり、恋愛をテーマとした歌詞であるため、台湾の音楽だと見なされる理由は鄧麗君という歌手にあるのではないかと思われる。親の回答ではこれら3曲以外にも台湾語の曲が目立つ。このうち「丟丟銅仔」は20世紀初めの宜蘭民謡であるが、それ以外は一般的に民歌といわれる少し古い流行歌曲であり、台湾に伝わる昔話やかつての台湾庶民の生活を歌っている。台湾を舞台とした戦後の映画「阿里山風雲」の主題歌である「高山青」は、もとは中国語曲であったが後に台湾語の歌詞がつけられた。中国語曲の「龍的傳人」と「鹿港小鎮」は、1970年代に中華民国の存在を主張すべく台湾で生まれた中国語歌謡である校園民歌（キャンパス・フォークソング）といわれるジャンルの曲であり、「你是我的花朵」はとても台湾的だといわれる台湾の人気歌手・作曲家の伍佰の曲である。

表1 「台湾の音楽」上位10曲

学生（173人）		親（16人）	
曲名	回答数	曲名	回答数
<i>望春風</i>	50	<b>望春風</b>	9
<i>家後</i>	36	<b>雨夜花</b>	7
<i>雨夜花</i>	33	<b>丟丟銅仔</b>	4
<i>傷心的人別聽慢歌</i>	16	<b>高山青</b>	4
<i>姐姐</i>	15	<b>家後</b>	3
<i>大藝術家</i>	14	<b>安平追想曲</b>	2
<i>月亮代表我的心</i>	12	<b>天黒黒</b>	2
<i>稻香</i>	12	<b>燒肉粽</b>	2
<i>甜蜜蜜</i>	11	<b>阮若打開心裡的門窗</b>	2
<i>入陣曲</i>	11	<b>鹿港小鎮</b>	2
		<b>龍的傳人</b>	2
		<b>舞女</b>	2
		<b>你是我的花朵</b>	2

イタリック：台湾語の曲

太字ゴシック：中国語の曲

「高山青」は両方の言語の歌詞バージョンがある

## アンケート結果：「我が国の音楽」

「我が国の音楽」に対する全回答は、大学生では746回答（うち不明10曲）、親世代では87回答で、あげられた曲目数は、大学生の回答では394曲（不明10曲を除く）、親の回答では65曲であった。

上位10曲を見てみると、大学生の回答では、第1位の「国歌」と第5位の「国旗歌」が入っている点が「台湾の音楽」と大きく異なる点であるが、他は「台湾の音楽」に対する回答とほとんど変化がなく、「望春風」「雨夜花」「家後」と現代の台湾中国語流行曲である。それに対し、親の回答では「国歌」「国旗歌」が入っていないうえ、「台湾の音楽」への回答と比べて中国語の曲が多くなっている。「茉莉花」は古い時代に大陸からの移民と共に台湾に入ってきた中国大陸の民謡であり、台湾の人々にとっても自分たちの民謡であるともいえる。1970年代に劉家昌によって書かれた「中華民国頌」は、台湾ではなく「中華民国」を称えた大衆歌曲であり、費玉清や鄧麗君によって歌われた曲である。「梅花」も同様に劉家昌作曲、鄧麗君歌で知られる曲で1976年に作られた映画の主題歌であるが、梅は同時に中華民国の国花でもある。

「康定情歌」は中国四川省に伝わる悲恋を題材にした民謡、「王昭君」は紀元前に政略結婚によって匈奴の王に嫁いだ漢族の女性の故事を題材にした歌、「何日君再来」は戦前の上海で劉雪庵によって書かれ、鄧麗君の歌で再度注目されるようになった曲である。これら3曲はいずれも大陸の題材を扱っている。「小城故事」も鄧麗君の歌った曲である。「彩虹的夢」は鳳飛飛、「青花瓷」は周杰倫の歌った現代の台湾流行曲であるが、上述のように全体的に見て鄧麗君が歌った曲が多い。「送別」は回答者の記述によると李寂同が詞を付けた19世紀アメリカの作曲家オードウェイの曲であるが、この曲は小学校教科書に掲載されることが多く、回答した2名の回答者の同項目に対する他の回答曲から推察すると、小学校時代に教科書に掲載されていた曲を「我が国の音楽」として連想したようである。

表2 「我が国の音楽」上位10曲

学生		親	
曲名	回答数	曲名	回答数
国歌	44	茉莉花	4
望春風	26	中華民国頌	4
家後	23	龍的傳人	3
雨夜花	19	康定情歌	3
入陣曲	13	梅花	3
国旗歌	13	王昭君	2
姐姐	13	青花瓷	2
傷心的人別聽慢歌	10	小城故事	2
月亮代表我的心	9	彩虹的夢	2
稻香	8	何日君再来	2
		送別	2
		高山青	2
		丟丟銅仔	2
		安平追想曲	2
		望春風	2

イタリック：台湾語曲

太字ゴシック：中国語曲

「高山青」は両方の言語の歌詞バージョンがある

### アンケート結果：「郷土の音楽」

「郷土の音楽」の項目に対する回答は、大学生は565回答（うち「布袋戲的歌」というジャンル回答1、確認できない曲10）、親世代は76回答（うち「歌仔戲」のようなジャンルで答えたもの4回答）あり、あげられた曲目の数は大学生184曲目（不明の10曲とジャンル回答1を除く）、親46曲目（ジャンル回答4を除く）であった。上位10曲の内訳を見てみると、学生と親のいずれの回答においても台湾語の曲が圧倒的に多いが、その内容には多少の違いを見出すことができる。学生回答での上位2曲である「望春風」「雨夜花」は、親世代の回答では16名中それぞれ2名と3名の回答数であり、決して多いとは言えない。親世代の1位と2位の曲は「丟丟銅仔」と「焼肉粽」であり、ほぼ2人に1人がこれらの曲をあげていることになるが、大学生の方では「丟丟銅仔」を回答したのはほぼ5人に1人、「焼肉粽」はほぼ14人に1人である。そのほかの台湾語の曲は2者間で重複しておらず、全体的に学生が回答した曲よりも親の回答した曲の方が古い時代の流行歌であり、親の回答では鄧雨賢のもう一曲の代表作である「四季紅」も回答されている。中国語の歌詞をもつ「外婆的澎湖灣」は校園民歌、「捉泥鰍」は児童用の歌曲として、いずれもよく音楽教科書に登場する曲である。「Country road take me home」はアメリカのカントリー歌手のジョン・デンバーの曲で、歌詞の内容は確かに故郷を歌ったものであるが、歌われた故郷そのものはアメリカのバージニア州のことであって台湾のことではない。回答者にとっての具体的な郷土ではなく、一般的に「郷土を歌った音楽」ということであろう。

表3 「郷土の音楽」上位10曲

学生		親	
曲名	回答数	曲名	回答数
望春風	57	丟丟銅仔	8
雨夜花	37	焼肉粽	7
丟丟銅仔	33	天黒黒	4
家後	31	西北雨	3
雙人枕頭	14	雨夜花	3
海波浪	13	望春風	2
焼肉粽	12	四季紅	2
外婆的澎湖灣	11	安平追想曲	2
捉泥鰍	10	舊情綿綿	2
追追追	10	捉泥鰍	2
		country road take me home	2

イタリック：台湾語曲

太字ゴシック：中国語曲

## アンケートに見る台湾のナショナル・アイデンティティ

以上のアンケートの結果から、本稿冒頭に掲げた、台湾の人々が共有するアイデンティティ、共通の価値観とは何か、という問いに対してどのような示唆が得られるかを考察していく。

はじめに全体的な傾向を見ると、「台湾の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」という3項目に対する解釈は、大学生よりも親世代の方がよりはっきりと区別して捉えているという傾向が見られた。親世代の回答では、「我が国の音楽」には中国語の曲および中華民国と直接関連性のある歌詞の大衆歌曲が連想され、「郷土の音楽」には台湾語の民謡や、やや古い台湾語の大衆歌曲が回答される傾向があった。「台湾の音楽」は両者のちょうど中間くらいの位置づけとなり、「我が国の音楽」と重複する回答が5曲、「郷土の音楽」との重複回答が6曲あった。それぞれの質問項目の上位2曲の違いにその特徴はよく表れており、「台湾の音楽」には日本統治時代に流行り、台湾の音楽文化の近代化（西洋化）を象徴する、台湾人作曲家による台湾語曲の「望春風」「雨夜花」、「我が国の音楽」には、大陸と共有する音楽文化を代表する古い中国語民謡の「茉莉花」と直接的に中華民国を称えた中国語大衆歌曲である「中華民国頌」、「郷土の音楽」には日本統治時代に生まれた台湾語の民謡である「丟丟銅仔」と、戦後間もなくの国民党支配の時代に大衆の苦しい生活を歌った大衆歌曲である台湾語の「焼肉粽」が回答されている。

これに対して大学生の回答では、「台湾の音楽」と「我が国の音楽」は、「我が国の音楽」に対して回答された「国歌」と「国旗歌」を除けばほぼ同意に捉えられていて、台湾語の「望春風」「雨夜花」「家後」に現在の人気歌手による中国語流行曲が加わったものとなっている。「郷土の音楽」に対する捉え方は親世代と共通しており、台湾語の大衆歌曲が選ばれる傾向にあるが、親世代の回答と比べると新しい曲である。

大学生の回答に見られる「台湾の音楽」に対する中国語曲の多さと「我が国の音楽」に対する「国歌」「国旗歌」の回答は、台湾社会が共有するアイデンティティ・共通の価値観という点から見れば、親世代からの変化を思わせるものである。なぜならば「我が国の音楽」に対する親世代の回答からは、徹底して「国歌」「国旗歌」などのかつての国民党政府からトップダウンで与えられた中華民国の愛国歌曲が排除され、代わりに「茉莉花」や民間から生まれた愛国的な「中華民国頌」「龍的傳人」「梅花」が選ばれており、中華民国としてのアイデンティティをもちつつも、それを国民党政府とは直結させていないことが読み取れるからである。それに対する大学生の「国歌」「国旗歌」の回答からは、戒厳時代を知らず、李登輝時代の国民党による教育の台湾化後に育ったこの世代においては、かつての国民党政府に対する抵抗感は薄れ、日本やタイの学生と同様に自然に「国歌」を「我が国の音楽」を代表する曲であると認識するようになってきていることがうかがえる（石井, 2012 ; 2013）。また、「台湾の音楽」に対する大学生世代の中国語曲の回答の多さは、戦後の中国語政策によって台湾の人々の母語が台湾語や客家語から中国語へと変わり、台湾の若い世代の人々が中国語に対して台湾アイデンティティを感じるようになってきているためであると考えられる。それにもかかわらず3項目すべてにおいて大学生の回答の上位を台湾語曲である「望春風」「雨夜花」「家後」が占めたのは、この世代にとって台湾語がもはや母語であるとは言えなくなっているにもかかわらず、これらの歌曲に台湾社会が共有するアイデンティティを見出しているためであると同時に、彼らにとって「台湾」「我が国」「郷土」が一致しつつあるためであると言えるであろう。20

世紀初めの近代化の中で西洋音楽文化の影響を受けた台湾作曲家による台湾語大衆歌曲を、現在の台湾の音楽文化の原点として共有しつつ、その上に親世代と大学生世代がそれぞれの時代の音楽文化の層を重ね、徐々に内省人と外省人の壁を取り払った台湾人としてのナショナル・アイデンティティーを作りつつあるといえるのではないだろうか。

付記：本稿は科学研究費基盤研究（C）課題番号25381203「音楽文化のグローバル化と音楽教育を通じた国民アイデンティティーの形成」の成果の一部である。

## 日本語参考文献

- 石井由理(2009)『『日本の音楽』の認識の世代間比較:山口県内のフィールド調査を中心にして』『山口大学教育学部研究論叢』第58巻第3部, 17-26頁
- 石井由理(2011)「日本の音楽に対する大学生と60歳以上の人々の認識」『山口大学教育学部研究論叢』第60巻第3部, 15-26頁
- 石井由理(2012)「タイの若者のタイの音楽に対する認識」『山口大学教育学部研究論叢』第61巻第3部, 1-12頁
- 石井由理(2013)「音楽文化と国民アイデンティティー:日本とタイの事例比較」山口大学大学院東アジア研究科『東アジア研究』第11号、1-16頁
- Chang, W. P. (2002)「台湾の近代化と日本」西川長夫・松宮秀治(編)『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』605-630頁
- ポンパイチット, パースック、ペーカー, クリス(2006)日タイセミナー(訳)『タイ国 近現代の経済と政治』刀水書房
- 劉麟玉(2005)『植民地化の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』雄山閣

## 英語参考文献

- Bangchuad, D. (2012). The transmission of the patriotic popular songs to enhance national consciousness. A paper presented at the 5th Comparative Education Society of Asia Conference, Chulalongkorn University, July 10-11, 2012.
- Cox, G. (2010). Britain: Towards 'a long overdue renaissance'? In G. Cox & R. Stevens (Eds.), *The origins and foundations of music education: Cross-cultural historical studies of music in compulsory schooling* (pp.15-28). London: Continuum Studies in Educational Research.
- Finney, J. (2011). *Music education in England, 1950-2010: The child-centred progressive tradition*. Farnham: Ashgate Publishing.
- Herbert, D. G. & Kertz-Welzel, A. (2012). Introduction. In D. G. Herbert & A. Kertz-Welzel (Eds.), *Patriotism and nationalism in music education* (pp.1-6). Farnham: Ashgate Publishing.
- Ishii, Y. & Shiobara, M. (2007). A quest of Japanese-ness in the Japanese music curriculum. 山口大学人文学部院軍歌交流研究施設『異文化交流』vol. 1, 28-36頁.